

稻盛和夫名言録

PRESIDENT

48期連続
No.1
ビジネス誌

2008年4~6月期~2020年1~3月期
日本雑誌協会調査(印刷証明書つき部数)

毎月第2・第4金曜日発売 2020.9.18号 プレジデント

価格 780円

ラスト メッセージ

これからの時代を
生きる人へ

経営の神様の 言葉学

迷いが晴れる。
最強のリーダーシップ入門

「一日一日を真剣に生きなさい」
「動機善なりや、私心なかりしか」



投資家が注目するアフターコロナの「一人勝ち」企業研究
「京セラ」と「JAL」稻盛銘柄の大奮闘

特別インタビュー——全葬連会長

全日本葬祭業協同組合連合会会長

1956年、神奈川県生まれ。父の急逝により、県立小田原高校に在学中、創業2年のさがみ葬儀社(後の富士見斎場・秦野市)を継ぐ。同名のセレモニーホールも運営する。日本葬祭業協同組合連合会は、56年設立の葬祭専門事業者団体(会員=57事業協同組合・所属員=11290社)。2018年から会長を務める。

志村けんさん。

コロナ死が
変えた葬儀の形

近年、変わりつつあつた「日本のお葬式」。そこにコロナの来襲。全国葬儀社の団体・全葬連会長に、コロナ禍での「新しい弔いの形」を聞いた。



宅に戻った岡江久美子さんの遺骨を抱えてメディアに一礼する夫・大和
豈さん。日本全国に衝撃を与えた

新型コロナウイルスと共生時代に入り、お葬式は変わったか。志村けんさん、岡江久美子さんが亡くなったとき、感染予防のため身内ですら顔を見ることもできなかつたと報じられたことが記憶に新しいが、新型コロナ以外で亡くなつた人の弔いはどうなのか。

全国1290社の地域に根ざした葬儀社が所属する全日本葬祭業協同組合連合会（以下、全葬連）会長の石井時明

——まず、コロナ禍以前の近年のお葬式事情から教えてください。

社葬の需要がほんなくなり、20～30年前なら普通だった200～300人規模の一般葬も非常に少なくなりました

た。十数年前から「家族葬」が広まつたのはご承知のとおりです。その家族葬も、以前は故人にご縁のあった方は見えましたが、「来なくていい」「行つてはいけない」という雰囲気に変わり、20～30人規模が中心になつてきていました。

——そのような葬儀状況の中で、コロナ禍となつた。感染死した方々の見送りでは家族葬もできなかつた。

新型コロナウイルスの感染で亡く

府が提示した「新しい生活様式」を踏まえ、業界団体共同で「葬儀業『新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドライン』」を作成し、各社にこれに則る葬儀を推奨しております。

——そのガイドラインの内容は?

の着用をお願いする。葬儀会場内の座席やお焼香の導線には1メートル以上、可能なら2メートル以上あけ、ソーシャルディスタンスを保つ。火葬場へのマイクロバスターも間隔をあけて着席してもらう。通夜振る舞いは大皿を避けて個々に提供する。などと細かく設定し、最大限の

葬送の文化・慣習は全国各地で違い、コロナ感染者の非常に少ない県もありますが、葬儀で感染者を絶対に出さないという思いは一致していますから。ご遺族も感染リスクに敏感になつておられます。例えば通夜振る舞いは元々出さないところもあれば、必ず出したところもあります。東京は後者ですが、



全葬連が会員の葬儀社向けに作成したコロナ対応によるガイドライン。防護服着用の実例。



コロナ対応の搬送ガイド用デモ写真。遺体が看護師によって納体袋に納められる様子を示す。

全国的に葬儀会館が増えたのは昭和60年代でした。時代の流れで、お葬式の大型化、小型化と変わる中で、儀礼が廃され、お葬式のパッケージ化が進んできました。

長い歴史を経たうえでの、コロナによるお葬式の変容だった。

—事前焼香で多くの方が早い時間に来られるなら、遅い時間帯を家族での親密なお別れの時間にできとうです。

はい。ですから事前焼香はコロナが収束してからも続き、定着すると踏んでいます。今後の潮流はまだ見えませんが、改めて思うのは、多くの人にとってコロナ禍が死を身近に感じる機会になつたであろうこと。「お別れは大事」と思う人が増え、葬儀の大切さが再認識されたと感じます。我々葬儀社は、故人様を尊び、ご遺族、会葬者双方の意を汲んだお別れの場を提供しなければ決意を新たにしております。

新しいスタイルとして定着するほどではないのですね。

スタイルといえば、お葬式には本来、人と人のつながり、助け合う感覚など日本人が大切にしてきたことが詰まっているんです。古くは「村八分」という言葉がありましたよね。結婚式、成人式、出産の世話など8つの事柄では地域から排除される者も、火事の消火活動とお葬式の2つは許された。お葬式はそれほど相互扶助が必要とされ、昭和40年代頃まで、隣近所で一所懸命お手伝いして行われたのです。

——石井さんは、その頃のお葬式をどう存じなんですね。

はい。昭和47年に家業の葬儀社を継ぎましたから。地元は神奈川県秦野市ですが、隣近所総出で祭壇を組み、料理、手配、運営などを行なってきました。

お通夜をしないで告別式だけを行う「一日葬」も増えました。お通夜も告別式も少人数で同じ顔ぶれなら、儀式は1回いい。お通夜は省略しようということでしょう。しかし、すべてが家族葬と一日葬になつたわけではなく、一般葬をされるご遺族もいらっしゃる。その場合、我々のほうから「事前焼香」を提案し、行われるようになりました。

——事前焼香？ 初耳です。

午後6時からのお通夜なら受付を4時からに早め、「ご都合の良い時間にいらっしゃいやつてください」と案内する。来られたら随时お焼香をしてもらうので、「事前焼香」と呼んでいます。分散して来ていただこうことによつて、葬儀会場内の密を避けるためです。ほとんどの会葬者がお焼香を終えて故人の顔見つかるところまでお参りしていきます。

場合火葬場へ直行となりました。厚生労働省が指定感染症としたことから、遺体を非透過性納体袋に収納・密封するよう通知が出て、その指示に則った方法だったのです。現実問題、お葬式を行うのは難しかった。

理由は2つ。一つは、通常のお葬式を行うと、ご遺体からの感染リスクが免れないこと。もう一つは、ご遺族に故人と濃厚接触した方がおられ、葬儀会場が新たな感染源となってしまう可能性があることです。もつとも、ご遺族が強く望まれ、故人のお顔を見てお別れできるよう透明の納体袋を用意して、お葬式を行ったケースもありますが。

——コロナで亡くなった方のお葬式を行った場合、コロナ以外で亡くなつた方のお葬式にも影響が出ましたか。

もちろんです。葬儀会館で隣同士の部屋を使うことができません。先述のとおり、コロナで亡くなつた方のご遺族には濃厚接触者が含まれていますから、コロナ以外で亡くなつた方のご遺族と通路などの共用は非常に危険です。そのため、消毒の徹底はもちろん、使用する部屋を大きく離し、時間差で